
魔法使いの少年

stone-force

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの少年

【ZPDF】

N7304M

【作者名】

stone-force

【あらすじ】

わたし高町なのは。今年で小学一年生でみんなからはなのはってよばれるんだ！

今日はいつも一緒に帰るともだちがいないからいつも違つ公園からおウチに帰ることにしたんだけど……男の子（？）が倒れてる！

！？どうしよう？

これが、わたしと彼のちょっとぴり運命的な出会いだった……

終わりと始まり始まり。（前書き）

今回のこの小説が人生初の一次創作というものだつたりします。駄文、誤字脱字、構成矛盾なんかは、やんわり指摘してくれると作者は眼の前にニンジンをぶら下げる口バみたいに頑張るので、いろいろコメントをお願いします。

終わりと始まり始まり。

星が降る夢だった。空いっぱいに広がるかすかな光は、お互いを紡ぎいつて古人たちが創造した神話を語る。

きっと、それは何もなければキレイと思うだらうけど今の僕にそんなことわかるわけ無くって。ありがとうと淡々とした口調で紡ぐ。突然に感謝の言葉を口にして少し驚いたようだけど、ぼくの考えに気付いたからか今度は目を見開いてまくしたてるようにして言う。一人ではダメ、と子供が駄々をこねるようだ。

ぼくは、曖昧な笑みで答えてあげるしかなかつた。

大丈夫だよ。お互いもうぼろぼろで、これから何ができるのだろうと思つぐらいクタクタで。そんなカツカウで意味がないことはわかつっていてもこれまでぼくを導いてくれたひとたちの思いだけで立ち上がる。ちっぽけな自己満足かもしれないけど。

立ち上がるのと同時に必死にもがいて一人で行くのを止めようとするけど、ぼくは半ば無視するように背を向けて、あちらからみれば星空が写つてゐるんだろうな場違いなことを思つて、と後は任せたと伝えて、

『約束の地』へボロボロになつた戦友とともに、向かつた。

終わりと始まり始まり。（後書き）

なんか、初めての一次創作だからかもしれないのですが原作キャラの固有名詞をタイプするのがものすごく恥ずかしかったです。今回はまだ誰も登場してませんけど……パソコンの前でわけもわからず身もだえする作者……気持ち悪いですね！！

オリ主 設定（前書き）

本編は次回から始めることになります。

オリ主 設定

とりあえず主人公だけで。あとから徐々に追加していきます。

主人公 名前： 高町 たかまち アーリン

性別：男の娘

身体データ

身長はクラスの中で平均ぐらい（女の子も含む）で体重も平均。本人はわからないと言っているが外見はハーフで女顔、黒髪に翡翠色の瞳が印象的で初めてなのはに会つたときは左目に大けがをしていたので現在は元の瞳と同じ翡翠色の義眼をはめている。

デバイスの名前と設定

アルバス（インテリジェントデバイス）AIは男性で冷静沈着でシズメの声をしている。暴走しがちのアーリンを抑える良きパートナー。マスターが記憶喪失のため能力や設定に謎が多いがアーリンの指示には基本的には従う。通常ではクロスをかたどったネックレスの形状をしている。

Form Lanceilot：アルバスで近距離戦闘をするときのモード。通常時のクロスが巨大化し剣となつて白衣とマントを混ぜたような純白のバリアジャケットも展開される。魔力光は白銀と蒼が混ざつてゐる。

魔力変換も『氷』で斬つたものを凍らせる能力がある

その他いろいろな設定

当時小学一年生だったなのはに公園で倒れていのところを発見され一時高町家で生活をするが、本人が記憶喪失で捜索願もなかつたことから養子となつた。名前は桃子が彼の外見と性別を勘違いして誤つてつけてしまつたのだが、本人は気にしないということでのままで。活発で明るい性格をしているが、そのためケンカごとも多く士郎と恭也からよく注意される。頭脳明晰で趣味は読書と少々インテリ臭いが表に出さないようにしてゐる。マンガも人並みに読む。好物は甘いもの。ちなみに彼は家族を名前で呼んで「父さん、母さん」とは呼んでいない。

オリ主 設定（後書き）

頭の中でいろいろできちゃはいるのですが、文にするのがムズカシイです。

日常と平和（前書き）

これから本編です。

見てくれる人がいるかどうかわからないですが、頑張っていきます。
書き忘れていましたが、筆者が本編を見たのは3年以上前なので細かい設定のつじつまが合わないのはあしからずに……

「また……あの夢か」

田覚めたばかりのぼくは夢の内容を思い出す。顔も声も確かに覚えてはいるようだけど田覚めてからではそんなことはすぐにウヤムヤになってしまい忘れてしまう。いつものことだと自分に言い聞かせてベットから抜け出す。

ただ今の時刻は午前4時半。世間一般の人たちから見れば早朝と呼ばれるこの時刻から高町家の稽古が始まる。ぼくも参加するようになつてもう何か月も過ぎたので、はじめはメチャクチャきつかったけどもつ慣れた。きっと田隠しをしてでも同じように行動してしまうだろ?」

まず、初めに今まで来ていたパジャマを脱ぐ。そして何ヵ月も稽古とともにしている相棒のジャージを身につけて洗面場にで顔と歯を洗う。寝ぼけ眼で歯ブラシをシャカシャカしている顔を鏡で見つめていると、鏡に人影が現れる。

「ん……アーリンか、朝から早いなお前は」

「おはよう、そういう恭也だつて十分早いさ」

この人は高町恭也。大体一年ぐらい前、道端で大けがをして倒れていて記憶喪失だったぼくを今現在まで養つてくれている高町家の長男さんだ。父親そつくりな黒い髪に日焼けした褐色の肌とがちりとした体つきはとても男らしく、かつこいい。性格はクールなのだがシスコンの疑惑があるらしく本人はかたくなに否定している。どうやら『妹思い』というのには世間からいろいろ言われるらしくなかなか認めようとしない。

（悪いことじやないと思つんだけど……どうして認めないのかな『

シスコン』）

「何か俺の顔についてるか?」

「いやなんでもない気にするな」

『どうやら恭也に指摘されるまでガン見していたらしくあわてて否定する。

ぼくと恭也は支度を終えて家の玄関前に出る。

「今日は少し遅れたみたいだな、恭也にアーリン?」

「そーだねー、恭ちゃんとアーリンが一人そろって登場つていうのもめずらしいし、なにかあったの?」

すでに玄関先で待つていて一人が声をかけてくる。

はじめに声を掛けってきた人が、高町士郎。いわずとしれた高町家のお父さんで喫茶店『翠屋』のオーナーも務めている。恭也よりもさらにがつちりとした体形でさらに高身長だ。イメージは『マトリヨーシカ』つていうどこかの人形みたいな感じ。でもこちらの大きいほうは小さいほうよりも霸氣と自信がケタ違いに大きい。

その次に声を掛けってきた人が、高町美由紀。恭也の妹で高町家の長女。文学少女つて感じの容姿に少しほのかなげな印象があるが士郎や恭也ほどではないにしろ体から滲んでる霸氣がその印象を打ち消している。ちなみに彼女は桃子さんよりも士郎さん似で黒い髪を長い三つ編みで束ねてる。

「大したことないさ、ちょっと寝坊したら洗面場にこいつがいたから一緒に出てきただけだ」

「そうだね、ぼくもちょっと寝坊しちゃつたけど……」

そこで美由紀がくすくす笑つた。どうしたんだろ?……

「だつて二人とも似た理由だつたからついね、いつもはそんなに仲良しつてわけじゃないからさ」

そういうふたかと思つたら今度は声をあげて笑いだす。なんかいろいろ複雑な心境かと思つていたらそれは恭也も同じだつたらしく抗議の声を上げようとしたが、

「無駄話はこれまでだ、あんまりこんなことで時間をとつていたら稽古の時間がなくなるぞ」

「そうだね、じゃあもういこつか」

士郎さんがそう声を上げたのと同時に美由紀は脱兎の「」とく走り

出す。

「あつ、待て！まだ話はついてないぞー？」

恭也が追いかける

「やれやれあいつらは……こつまでたつてもあんなんだからな」「まあまあ、仲が悪いよりマシだしそれより一人を追いかけないともつそろそろ見えなくなるし」

「せうだな、じゃあ行こう、一人とはルートが同じのはずだから大丈夫だらう。今田は少しペースを上げていくぞ、準備はいいかアーリン？」

士郎さんが走りだしたのをぼくもあわてて追いかける。興奮はとつづの昔に冷めていた。

朝の訓練が終りし家に帰宅するとコンピングのまくらごとにあこが漂ってきた。

「あら、おかえりなさい。もう朝ご飯はできてるわよ」

ぼくらを出迎えてくれた人は、高町桃子さん。茶色く長い髪と白い肌は彼女の実年齢を知るのには向かないぐらいきれいで一人の子持ちには見えないほどだ。高町家のお母さんとしてみんなの世話を焼いたり『翠屋』の手伝いをしてくる。そのせいいか料理がとても上手でなんでも器用にこなす。ぼくのこの『アーリン』って名前も桃子さんが付けてくれたり、学校に持つていくお弁当を作つてもらつたりいろいろお世話になつてゐる。

「おはよう桃子」

「おはよう母さん」

「おはようお母さん、なのはつてもう起きてるの？」

「いいえまだなのよ……じゃあ折角だしあー君に起つてしまつてもうおつかしく？」

おはよつて言いかけたぼくに衝撃の言葉が向けられる。なんでもうきなりぼくがでてくるんだ、と尋ねようとしたところぼくよりも

はるかに早く返した人がいた。

「なんでわざわざこいつにそんなことをやらせる、美由紀にやらせればいいだろ?」

恭也だった。なんとなく『システム』の意味がわかつたよつた気がしないでもない。

「だつて、恭也も美由紀も汗だくじゃない。ふたりがシャワーに行って帰つてくるのを待つてたらなのはとアーユ君がバスに乗り遅れるかもしねないし、その分アーユ君はあんまり汗をかいてないよう見えるから一人よりも適任だと思ったからよ」

「……なら、母さんがいけばいいじゃないか」

「わたしは見ての通り、朝ごはんの支度があるからだめ、アーユ君が適任なの」

反論むなしくコトーンパンにやられた恭也はこいつちをじりりと睨む。

「ぶつちやけ半端ないぐらい怖いです、まじで。」

「ほら、アーユ君睨んでないでさつさと行くよ?」

恭也は美由紀に引きずられていった。

「じゃあアーユ君は、なのはのことはお願ひね?」

桃子さんも料理のほうに戻つたらしい。

「私もこれから喫茶店の準備があるから後は任せたぞ?」

士郎さんも翠屋のほうに行つてしまつた。残されたぼくは一人でため息をついたけど、誰も聞いていなかつた。

階段を上がりなのはの部屋の前まで來た。

「なのはー、朝だぞー、起きろー!…」

ドアをたたきながら呼びかけるが反応なし。たまに寝坊するとしどもいつもはもう起きている時間なのでとりあえず呼んでみたものだめだつた。しょうがねなーと呴きながら部屋にいると、やはりこの部屋の主は絶賛爆睡中だつた。

「なのはー、もう起きないとマジで遅刻するぞー?」

今度は体を揺さぶつてみるが効果なし。今までここまでして起きたかつた経験はなかつたのでしばし考えてみる……とりあえず、や

つてみる価値のありそうなものをやる。なのはの小さこ鼻と口を同時に抑える。やがて、息ができないくらい……

「……？」

つかの間、苦しそうに身をよじりて急に眼を開けたなのは涙目で叫ぶ。

「「ほほほ……朝からなんでこんな……ひどいことするのーーー君？」

「それはいいがかりだ、なのは。ぼくは何度か声だけで起こうとしたけど反応しなかつたし体をやすりでも起きなかつたんだからしようがないだろ？」「……」

「でつ、でもでももつと優しい方法で起こしてほしかつたよ……」「いつもと同じやり方で起きれなかつたからだろ？だったら、他にどんな起こし方があるんだ？」

「えつ……それは……」「「よろしくよ」

「きこえないぞ、なのは」

瞬間、なのははあわてて手を振つて、

「なんでもないよ~」

と言つてベットに顔をうずめてしまつた。

「なんでもいいから早く起きてこよ、もうみんな起きてるんだからな？」「

そう言つてなのはの部屋から退出する。そういうえば紹介が遅れたな。いまのが高町なのはでぼくと同じ小学校に通う同じ年の高町家の末っ子だ。土郎さんよりも桃子さん似の容姿で茶色いセミロングの髪をしており肌も白い。勉強は理数系は得意だけど後の科目はぼちぼちやぱつとしないとか、運動神経は残念ながらよくなく体育の授業のときはいつも憂鬱そうな顔をしている。数ヶ月前、道端で倒れているぼくを発見してくれたのもなのはであり命の恩人ともいえるし学校での友達もなの派を通じて出会えたしそういう面では、土郎さんと桃子さんよりもお世話になつてこむ。

（まあ、確かに感謝してるけどね）

そんなこんなでしたの階に降りるとすでに朝ごはんの準備は整つたらしくリビングからいいにおいがする。ドアを開けてリビングに入るとおいしそうな（実際おいしいのだが）ハムエッグや新鮮で色鮮やかなサラダが並べられていた。

「あら、なのははちやんと起きていたかしら？」

とすでにシャワーから戻った2人とともに朝食を食べている桃子さんが声を掛ける。

割とすぐに起きたと答えるながら自分の席（男女別に分かれて年齢順に並んでいるのでぼくの隣の席は恭也で向かいがなのはだ）にすわろうとする……桃子さんが

「ご飯の前にシャワーを浴びてきなさい、汗臭いままじゃ学校に行けないでしょ」

と言ったので、おとなしく従うことにする。ぼくがシャワーを浴びるためにリビングを出て行ったのと同じぐらいのタイミングで制服のなのはが入ってきた。

「おはよっ……みんな、あれアーユ君は？」

「シャワーを浴びに行つてこる、しばらくしたら戻つてくるだらう」「恭也が答える。

「でも、本当に今日はぎりぎりね、アーユ君にはすぐご飯食べと貰わないとい巴斯に遅刻しちゃうわね」

「うう、ごめんなさい」

美由紀の何げない一言になのはは申し訳なさうが桃子がフォローする。

「とりあえず、なの派はすぐご飯を食べる」と。本当に遅くなつたらお父さんに送つていてもうえぱいいしお父さんはもうご飯も準備も済んでるしね

じゃあやつする、なのはは答えて桃子が焼いてきたトーストを食べ始める。

ほどのくして、シャワーを浴び制服に着替えたアーリンがリビングに戻つてきて遅れながらトーストを食べる。そして、2人が同

時に食べ終わつたてしばらくしたらこつもの時刻にいつものバスが
やつてきた。

「それじゃあお父さんお母さん、いつでもおまへすー！」

「ぼくもいつてくる、士郎に桃子！」

なのはとアーリンはかばんを持つて玄関先に見送りに来てくれる

向親は元気のくわびで

「ああそうだな、元気のはいいがはしゃぎすぎるなよ?」
「行つてひしり2人とも転んで怪我しないよ?」
「はい、はい、はい!」

「はあ～い！」

今日も2人は元気に登校する。

ぬままい。

こんな文章書くのに一体何時間費やしたのだろうか……

本文中のアーリンは土郎と桃子に「さん」付けでよんでもいますがこれは彼が2人に對しけ尊敬しているからです。でも実際呼びかけるときは「さん」がないのは家族の間で「さん」付けはおかしいと2人に指摘されたからです。

多分これからはこんなグダグダした感じで進みますし更新も不景氣気なると思いますが、それでも付き合つていただけるなら筆者はみなさんにこれまでにない感謝の気持ちをささげたいと思います。

未知と遭遇（前書き）

無印とA、S編はひとつと終わらしてオリジナル編をやりたいな
とか思います。

まだ具体的な感じは決まってないし、いろいろ問題もありそうなので（構造とかネタとか）なんとも言えませんけど……

時は流れて今は昼休み。退屈な授業ないつたん終わりを告げてささやかな解放感に包まれる。

ぼくはかばんから朝作つてもらつたお弁当箱を取り出でつとすると上から声が降つてくる。

「アーチ君、一緒に」飯食べよう?」

なのはだ。ぼくのお弁当と色違ひのピンクのナップキンで包まれたものを掲げながら誘つてくる。

「さつさとしなさい、昼休みが終わっちゃうでしょ」

このどことなく命令口調なのが、アリサ・バニングス。金髪と勝気なつり眼が特徴的でかわいい外見をしているけど、強気な性格が体からにじみ出でている。十郎や恭也とは少し違つタイプの霸氣つて感じ。さすがお嬢様だ。

「まあまあアリサちゃん、まだ昼休みは始まつたばっかりだしそんなに急がなくともいいんじゃない」

そしてこつちの穢やかな感じな子が、月村すずか。黒い髪を白い力チュー・シャでまとめている点も相まっておとなしい印象というか儂いというかそんな感じがする。『月村家』といつこの地方を代表する名家のお嬢様であり、なぜかしら見た目の印象と異なり運動神経が半端なく高い。お嬢様にもいろいろいるもんだ。

「だめよ、限られた時間を使いこなすにはきちんとした計画と努力が大事なの。短い時間ぐらうにどうつてことないつて思つてゐる奴から損するものなの」

「そうかもしれないけどそんなに急いだらもつたいたないじゃない、昼休みだし」

「そういう考え方がだめだといつてゐるのー!」

「あのさ、2人ともぼくは準備できたよ?」

本格的に議論が始まる前に2人を抑える。短くはないが長くもな

い時間を無駄に過ごしたくないつて点にはアリサに賛成だし、なのはが少しおろおろしていて2人を止めるには時間がかかりそうだらだ。

「なら早く行っちゃいましょ、場所も確保しないといけないし」「一人早足で教室の出口に向かうアリサ、それに残された3人がついていく形になる。

「ちょっと、またーーー！」

しかし、入り口付近から1人の少年がアリサたちの道をふさぐ。「だれよ、あんた？」

「おいおい忘れちゃ困るぜ、このクラスどころか、学年でもトップクラスの成績を誇ってるこの進藤正義のことをなあーあ、マサだ。何してるんだろうあいつ？」

「もしかして、アー君の友達？」

「そうだ、そこにいるアーリンとは友達だ」

なのははぼくに質問したのにマサが答えたので少し驚いているようだった。

「で、なんのよう?ぼくらはこれから昼飯を食べに行くんだけどうだつた。

……

「それだよ、お前がいないと話が盛り上がりがないから今日はオレらと飯食おーぜ?」

「ちょっと何よそれ、アーリンはわたしたちどこの飯を食べるって言ったんだからあんたなんかに口を挟まれたくないわ」

ぼくの代わりにアリサが答えるけど、やっぱりこの二人は相性悪いな。2人とも我が強いからこうなるのはしょうがないかもしれないが。

あいつの名前は進藤正義。自分で言っていた通り成績は極めて優秀かつ運動神経もよい。茶色がかつた髪を短髪にしており活発な印象を与える。性格も明るくてみんなに慕われやつがいるクラスではいじめが起きなかつたという都市伝説みたいなことも起きたらしい。ちなみにぼくの同性の友達第一号だ。

「お前が勝手に拉致してやるようなもんだ。それに最近ずっとお前たちに付き合つてゐるなら一日ぐらいいいじゃねーか？」

「あんたが誘うのが遅いのがいけないんでしょ」

なんだとおーっといつてマサがアリサをにらみつけた。

一触即発の空気が教室の入り口付近を満たす。さすがにまずいと思つたぼくはふたりの間に割つて入る。

「落ち着けつて、今日はアリサたちで明日がおまえつてことで解決じゃないか、な？」

一人の視線がはずれる。

「……しようがないわね、私だつてこれ以上時間を消費したくないからそれでいいわ」

「……まあ、それが一番無難だな。今回はそれでいいか」

じゃあ、明日は絶対だからな?と念を押して言つてマサは自分のグループに戻る。融通のききやすさもあいつの長所だ。

「じゃあぼくらもいこつか?少し遅れちゃつたみたいだし」

「そうね……そうしましょ」

すたすた歩いていくアリサ。今度は4人で固まつていつもの場所に向かう。

「さつきのアーチ君、すごかつたね」

「すごいってなにが?」

4人でお弁当を突つついでいると思いついたようになのはが言つてきた。今は屋上、吹き抜ける春風が解放感をさらりと高めてくれてる。

「さつきのアリサちゃんと進藤君のことだよ。わたしなんか声もかけられなかつたのにあつという間にけんかを收めちゃつて。これも稽古の成果なのかなあ」

適当に相槌を打つて流そうとしたのにすずかが話題に乗ってきた

「そうだね。初めて会ったときは頼りなかつたのに今じゃあ結構けんかとも抑えてくれてるし、稽古の成果は十分出てると思うよ」「確かに、転校初日なんてよくこんなやつがこの学校に入れたものだわつて思つていたし」

だんだん話が思いもよらない方向に移つてきた。本人のいる目の前でそういう思い出話は正直メチャクチヤ恥ずかしいからやめもらいたいんだけど3人だけでどんどん盛り上がって行つてしまつ。きっとこの手の話は3人が満足するまで続くのだろう。一度決壊した河川の氾濫は嵐がやむまでおつさまらないようだ。

嵐がやんだ頃には昼休みもほとんど残つていなかつた。

放課後、授業から解放される。今日も「田」苦勞様でした。

昼ごはんの時の3人とはここでいつたんお別れ。3人には塾があるけどぼくは通つていない。放課後に自分から進んで勉強するなんてとてもじゃないができないし、翠屋の手伝いや稽古をするほうがぼくには向いている。といつても、今日は一つともお休みだつたのでマサの家で遊ぼうかと思つて声をかけたところ家庭教師が来るそ�でそんな時間はないとのこと。完全に、暇を持て余していた。

「しょうがないか……」

ぼくはひとり、家に向かつて歩き出した。

帰り道の途中で特に何かあるわけでもなくそのまま家に着いた。士郎さんと桃子さんにあいさつしてそのまま部屋で制服からパジャマに着替え、昼寝をすることにした。今朝は奇妙な夢を見たせいか少しね足りないし宿題も特に大したものはないかった。

軽く眼をつぶつてているだけのつもりだったのに、いつの間にかぼくの意識は深い眠りに落ちた……

空は漆黒に染まっていた。どこまで行つても深いクロの光景に二半規管が狂つて自分がどんな状態さえも確認できなかつた。でも『落ちてゐる』つて感覚はないからぼくの足はきっと地面についているのだろう。そう思つたら下のクロがねずみ色に代わる。そこからクロに伸びてゐるねずみ色の柱が普段からとおつてゐる通学路の電柱だと氣付いた。そこに気付けばもう簡単、深夜の通学路があたりに存在していた。

（ぼくは寝ていただけなのに、どうして？）

そこで駆ける小さい影。あの姿は……

（なのはが、どうして？）

小さい何かを抱えたまま走つてゐるあの姿は義理の家族の末っ子だつた。そのあとから追いかけてくる大きな『クロ』には口がないがまるで彼女を狙う猛禽のようだつた。

（助けなくつちゃ……！）

しかし、そこで空に桜色の稻妻が、漆黒の空を切り裂く。彼女を守るよ。

（なのは……！？）

アーリンは桜色の稻妻のあまりの眩しさに目をつぶつてしまつ。

そのまま、彼は夢から覚めて行つた……

「今の夢つて」

よくわからない『クロ』いものが出てきた。でも今朝見た夢でも同じくらいわけがわからなかつたしその点では今までとは変わらない。けど、確かになのはが出てきた。これまでの夢の中で特定の人を覚えてるなんて初めての経験だからだろうか、いやな予感がする。時計はとつとも深夜を指してゐた。

「まさかね……」

そう呟いて玄関の靴を確認する。偶然か、なのはの靴だけ見当たらない。予感が予想に変わつた。

アーリンは、自分の靴を部屋に持つていき急いで着替えてそのまま一階の窓から飛び降りた。

「なにもなれば、それに越したことはないんだけどね……」

眩きながら、夢で見た通学路へ全力で向かつた。そらはやつぱり漆黒に染まっていた。

アーリンがそこに着く前に予想は現実に変わっていた。アスファルトは剥がれ電柱は飴にみたいに曲がっていた、どう考えても異常だつた。

「頼むから間に合つてくれよ……」

でも自分に何ができるのだろう、あんな化け物は大の大人だつてどうにもできないはずだし、ましてや子供の自分に何ができるのか。もう考えても遅い、足はもう夢の場所に向かつているしこのままなのは一人を見捨てるわけにもいかなかつた。

しかし、不思議なことにアーリンの中には単になのはを助けるという気持ちしかなかつた。その理由を深く考えないままとつとう夢の通学路に着いた。

「まだ来ていかないのかな？」

勘違いつてことはないだらつしつたい何が違つたのかと思つていたら、不意に轟音が鳴り響く。

来た……！……つと思つた瞬間、見覚えのある姿が見える。

「なのは！」

アーリンが声をかけると信じられないものを見た顔で、叫ぶ。

「アーリン！？」

「話は後だ、逃げるぞ！……」

なのはの手を強引につかんで走り出したものの、2人ともほとんど限界だつたせいで化け物との距離は広まらない。むしろ、じわじわ縮んでいるようだしあんなものに体力が存在するのかも疑問だつた。

「どうしよう……！」のままじや追いつかれちゃつ

なのはが涙目で問いかけてくる。

（どうする、一手中に分かれたからって確實に逃げられるわけじゃないし何よりあの化け物に関する情報が少なさすぎる……）

「仕方ない……なのは！」

いきなり、なのはの名前が呼ばれた。その声の方向にはへんなイタチ（？）みたいな生物がなのはに抱かれていた。

「イタチ（？）がしゃべった？！」

驚愕の新事実だ。人間以外に人語を使う生き物がいただなんて……「ぼくについてはまた後で説明します！！ですからいまはぼくの指示に従つてください！！」

お、おお～っと情けない返事をしたアーリンは動搖を隠せないし、隠せるほどの余裕もなかつた。

「それじゃあぼくたちは次の角を左に曲がるので、あなたは右に曲がつて隠れていてください！！」

300メートルほど先に丁字路が見えたからあれのことだろうとは思う。いまだに手をつないだまま走つてゐるのはの顔を見る。もう体力の限界といった面持ちで心配になつてしまつ。そんなアーリンの視線に気付いたのかなのはは精いっぱいの笑顔で、

「大丈夫、私が……どうにかするから、任せと？」

そこで、ふたりは左右に分かれた……

アーリンは振り向いた。あのイタチ（？）は一体何をするつもりなのだろう、気になつて仕方がなかつた。どうやら電柱の陰にまわつて何かをするらしい。

化け物はやつぱりなのはたちのほうに向かいその距離はみるみる縮まつてゆく。わずか数メートルを残すだけとなつた。

空から桜色の稻妻が、なのはを守るように空を切り裂く。その際の衝撃が数十メートル離れているここまで伝わってきた。（すごい……よくわからないけどものすごい力だ！）

桜色の粒子があたり一面を雪のようにあたり一面を照らしている。

そんなときだつた。誰かに呼ばれたような気がした。しかしあたりは非日常以外なにもないただの住宅地だ。

『マスター、こちらです』

つい先ほどまでなのはと手をつないでいた左手に今まで見たことのないクロスが握られていた。

「今度は無機物かよ……もう！」まできたらなんでもいいかもしない」

『わたしのことはまたあとでお話しします。ですから今は私の名前を呼んでください、そうすれば彼女を助けることができます』
「なのはを助けられるのはいいけど、ぼくはお前の名前なんて知らないぞ？』

『大丈夫、あなたは識つてます。わたしはマスターの魂と呼ぶべきものの結晶のようなものですから』

左手を握りしめる。クロスが手にくい込ん痛みで現実のことだと痛感させられる。

（今はまだ分からないことが多いけど……）

落ち着いて深呼吸をする。一呼吸……二呼吸……。

今まで何があつたか思い起こす。そんな中でわかつたことが一つあつた。

「あのなのはが戦うならビビッてる暇はないよなあ……アルバスッ！……』

『That's right!! Form Lancelot set up!!』

未知と遭遇（後書き）

こんな文章書くのに5時間以上費やしてしまいました（笑）
できればもっとスマートにしたいですねー

変化と覚醒（前書き）

更新が遅いのは筆者のせいですが、気長に待ってやってください。

「ふあ～」

いつもの習慣通り午前四時半に起床した。今日は早朝稽古がないのでこのまま一度寝してしまったも悪くはなかつたがきっと夢でも昨日の出来事がよみがえるだらう。

「魔法……か」

昨日のイタチが言つこは、彼はこの世界のものでなく別の世界から来てここに『落し物』を探しに来たらし。名前はジュエルシードだつたか？昨日の化け物のように何かの生物に憑依してそいつの願いをかなえようとする実に厄介な代物、ロストロギアの一つらし。憑依したものに強大すぎる力を与えるジュエルシード、もし悪用しようとたぐらむ手に渡つたら……イタチはそんなことを考えてるわけか。

でもこの世界には魔力を持つ人間は極めて少数らしくそこまであせらなくともいとと思うのだが、昨日の化け物のようにじぶんなことにつながるか予想できないためやはり早めに回収したいとのこと。その理屈も理解できるしそんな危険なものはさつさと持つて帰つてほしい。しかしイタチには魔力なるものが残つてないらしく今すぐに回収作業に復帰するのは不可能でしばらくの間でいいから手伝つてほしいらしい。ぼくとなのはの一人で……

詳しいことはまた明日じつくりと話し合つて今後の方針を立てるから、昨日はこれでお開きとなつたわけだが……

「ん～～～にやあ～」

昨日の化け物イベントが終了して無事この家に帰つてきてぼくの部屋でイタチの話を聞いていたらいつの間にかなのはが僕のベッドで寝てしまつっていた。どうやら疲労困憊だつたらしく何度起こしても無反応を貫き通す。

こつものように鼻と口をつまんでやろうかと思つたのだがかわい

そうだったのとそのまま寝かせてあげた。ぼくの部屋にはベッドの代わりになるものが他になかったので仕方なく一種に寝たというが昨日の顛末。

「はあ～」

「誰も聞いていないのをいいことに大きなため息をつく。なんでもうなつたの……」

「あ、おはよ～。」やむこおず

「イタチか……まだ寝ていてもいいよ～きのう中に知つておきたいことは大体わかつたし」

「ぼくはイタチじゃなくてフェレットです……じゃなくて、昨日のうちにあなたの名前を聞いてなかつたので教えてくれませんか？ ぼくはユーノ・スクライアといいます」

「そういえばそうだね僕の名前は高町アーリン。なのはと同じ年だよ」

「じゃあやつぱり女の子ですか？ 昨日のバリアジャケットはズボンだつたけど、なのはとも仲がいい姉妹みたいだし」

「いや……ぼくは男だよ」

「ポク、ポク、ポク、チーン……」

「ええええええっ！？！？！？！？」

「もういいよ、その反応慣れてるから……」

「じゃあ姉妹じゃなくて兄妹なんですか！？」

「どっちかっていうと姉、弟だね。ぼくは孤児だつたから養子つて形で高町家に入つたんだ」

「いわれてみれば……全然似てないですし、すみません変なこと聞いたやつで」

ユーノの頭が申し訳なさそうにちょこんと揺れる。

「いいよ気にしてないし、それより下でシャワー浴びてくるからその間なのはをよろしく。大きな声は出さないでね？ 家のほかの人には気づかれるのはめんべくさい展開になりそうだし」

着替えをたんすから引っ張り出します。ユーノがわかりましたと返

事をしたのを背中で確認して下の階のシャワー室に向かった。

そんな……信じられないとユーノが呟いていたけど誰も聞いていなかつた。

「あつアー君、おはよー」「

「ぼくが部屋に戻ってきた時すでになのは起きていってはユーノと何かを話していたらしい。昨日途中で寝てしまい聞いていなかつた話を聞いているのだろう。まだ寝むそしだが僕にあいさつできる程度には覚醒している。

「うん、それで何を話していたんだ？ 昨日の続きか？」

「そうだよ、わたし途中で寝ちゃつたし、ユーノ君がしたい検査があるつて言つたから」

「検査？ なんだそりゃ？」

ユーノに目を向ける。

「ふたりの魔力測定をする検査です。あまり厳密な方法ではありますんがとりあえずの目安にはなるかなつて。ぼくが思いだしたときにはアーリンはいなかつたし、ちょうどなのはが起きたので」「にやはは……わたしはともかくアー君はとっても強そうだよね、きのうの大きいのだつて一撃だつたし」

「それに、アーリンにはわからないことがあります。昨日のジュエルシードがどうなつてしまつたのか……」

「そんなこといわれても……」

きのうの夜から肌身離さず持つている銀色のクロスに目を落として呼びかける。

「アルバス、バリアジャケットを」

『OK、マスター』

部屋が蒼を伴つた白銀の光に染め上げられる。

そこには純白のバリアジャケットとその中を『青い模様』が動い

てる。いや、蠢いてると言つたほうがいいかもしない。

「ほんとに不思議だよねー、なんだか生き物みたいに動いてるし…

…ちょっと癒されるかも?」

「これつてきのうのジュエルシードを取り込んだつてことになるの、

ユーノ?」

ユーノは顔をゆつくりと振る。

「すみませんがぼくには見当もつきません、もつと専門の知識のある人ならわかるかもしませんが」

「気にして、わからないことがあるのはぼくも同じだから」

そういうてユーノに伝えてからきのうの記憶をたどつていった…

「なつなんなの、これ!?」

今日の夕方に偶然出会つた少女にぼくの持つていたデバイスを託して、起動した。

(まさかこんなバカ魔力だなんて!-!)

あたり一面が桜色に染め上げられるほどの魔力。それはもう力の荒波といつていいい程だった。

(でもこの子は戦いじやあまるで素人!-まだ、どうなるか分からな
い!-!)

さつきまで逃げていた様子をつかがうと、戦闘経験が豊富とはいえないともかまわないから、せめて運動神経の良さを願つた

もののがめだつた。あの女の子が来ていなかつたらもう一人で完全にやられてしまつていただろう。

「ユ、ユーノ君、次は?…次はどうするの!-?」

「思い浮かべて、強い自分の姿を、心の中で思い浮かべるんだ!-!」
えつとー、えつとーと少女が困惑している。急いで!-!もうすぐ

そこに…

化け物の目玉のような穴がぎょろりと動く。瞬間息の詰まる冷気が体を駆け巡った気が来た。

「もう、これで決定…どうにかなつて、お願ひ……！」

『OK - R i s i n g H e a r t s e t u p - -』

デバイスの無機質な機械音声が告げられる

少女が桜色に光に包まれる。が一瞬で光ははじけて再び姿を見せる、純白のバリアジャケットをまといながら。

「これって……」

「よかつた！やつぱり才能はあつたんだ！！！」

でも喜んでいられる時間はなかつた。死神の大がまみたいな真つ

黒いカギヅメが彼女に振り下ろされる

「！？」

『protection field』

桜色の障壁が展開されカギヅメが受け止められる。

(堅い……これならもうしばらく持つてくれる)

「ユーノ君、次は！？」

「今展開している障壁のほかに攻撃の魔法があるはずなんだ！それをどうにかしてあれにぶつけて！！！」

「そんな……いまこれだけ……でも……きついんだけど

そう言つている間にも障壁にひびが広がつていく……万事休すか

……

「もう限界……」

桜色の障壁は碎かれ、少女と化け物の空間が埋まる。大がまが振り下ろされる。目玉のような穴がゆがんだように見えた。

「オラア——ツ！！！」

突如、一瞬で化け物は『凍つて』カギヅメの動きが止まり、そのまま碎かれた……

木つ端みじんになつた化け物の残骸の先に先ほど別れたもう一人の少女の姿があつた。

「今つて……アーノ君なの？」

「そりみたいだね……」

無事でよかつた、と言つてくる少女、彼女も純白のバリアジャケットと剣型のデバイスなのだがスカートではなくズボンをはいていた、一つ奇妙なことをユーノは気付いた。

（あの子……大きな魔力を持つていなかののか、反応が薄い。でもさ

つきの攻撃の威力は本物だつた。何かのレアスキル持ちなのか）

「あの、ユーノ君？ 何か光つてるよ？」

「ホントだ？ なんだろ、あれ？」

化け物の残骸がどことも想像しないうちに消え失せ代わりに青く輝く宝石のようなものがひとりでに浮かんでいる。

「あれがこの事件の発端『ジュエルシード』つていうロストロゴギアだ。どこかに消えちゃわないうちに封印しておかきやいけない。なのは」

「でもわたし封印のやり方なんて知らないよ」

「大丈夫、細かいことはデバイスがやってくれるから念じるだけができるはずだよ」

わかつたとうなずいてなのはは封印を念じる。レイジングハートから淡い光が生まれジュエルシードに向かうのだが……

『refused』

「あれ……？ なんか、封印できないっぽいよ？」

「そんな！？ 活動中はともかく、機能は一時的に停止しているはず……」

どうして……とユーノが考える前にジュエルシードの光が増し先ほどの危機を救つた少女に向かつて飛んでいった。

「うつ！」

「アーユー！」

「大丈夫ですか！？」

頭を守るようとつさに組んだ腕を下ろしながら絞り出すように答えた。

「大丈夫……いきなりで驚いただけだから」

ふう、とため息をついて安心するなのは。しかしユーノは安心する前にある変化に気付いた。

「あの、もしかしてその腕に付いた青い模様つて『ジュエルシード』?」

「えつ? 何をいきなり……」

『completed number -17』

デバイスから無機質な男性音声が発せられる。それの意味することは明白だった。

「いきなり、一体なんなんだアルバス!!」

『わかりません、マスター。私の機能が勝手に作動したとしかお答えできません』

「そんなこと言われたつて納得できるか!?! 答える!!」

『申し訳ありません。これは私自身、知らないことです。『ご容赦を』「あのー、アー君? そのことはとりあえず後回しにして聞いてほしいことがあるんだけど……』

なのはが恐る恐るといった口調で話しかけた。さつきから『アー君』って呼んでるけどまさかあっちの子は男の子!?

まさかね……とユーノが考へてゐるうちに、デバイスに向けられていた顔がなのはに向かう。

「実は、さつきまで頭から離れちゃつていたんだけど、わたし結構いろいろやらかしちゃつて、その、なんていうのか……」

なのはに注意されて少女があたりを見回す、するとあたり一面に破壊の傷跡が生々しく残つていた。折れかかっている電柱に、ひびが入つて地面が覗けるアスファルトに崩壊したコンクリートの壁。隣人ともつと仲良くできるようになるだらつ、近年さやかれる近所関係の弱まりを、きつと。

訴訟問題にならなければ……

ユーノは、あれだけの魔力だったんだ無理はないと妙に冷静だったのだが二人の少女は顔を見合わせる。

「これは……まずいな」

「だよね……さすがにお説教だけじゃ済まないよね……？」

「二人とも顔が青くなっている。じゃあやることは一つだよね……

とお互いにこうなずきあつて足元にいたコーンを拾い上げる。

ふたりは同時に駆け出した、もとい、逃げだした。

「「とりあえず、こめんなさい……！」」

謝罪の言葉は傷だらけになつた通学路に吸い込まれていった……

「で、結局どうなるのこれ？」

きのうの戦闘終了後から何も起きてはいないが『ジュエルシード』と呼ばれる危険物を持ち歩く感覚はコートの中に時限爆弾を持ち合わせているようなものだった。

「取り出す方法がわからないうちはできるだけバリアジャケットを装備しないでそのままがいいと思います。いくらなんでも扱いがわからない危険なものは放つておくしかないですし……」

「でも正直こんなもの抱えたまま日常生活を送るのはキツイんだけど……アルバス、どうにかならない？」

左手に持つている通常のクロスに問いかける。

『はい、マスター。私には取り出す方法はわかりませんが、確実に安全であると解ります』

「なんじゃそりや……、相変わらず理由はわからないのか？」

『すみません、今の状態は極めて安定で普通に封印をかけるよりも良い状態ではあるのですが……』

アーリンがさらに何かを言おうとしたがコーンが止める。

「まあまあ、これ以上はきっと何もわからないでしょ、あとで考えましょう。それよりなのはの検査結果が出ました

「へー、どうだつたのコーン君？」

コーンのもとに光が集まり一枚の紙のよつになつた。

『半ば想像通りだけどあらためて見るとやっぱり凄いな……検査結

果は『AA+』

「『AA+』？す』いのかな、それって？」

なのはの魔力についてコーノが説明しているのをアーリンはほとんど聞かず、一年ほど前高町家に拾われたころを思い出す。
(やっぱり、一年前に拾われる以前のことと何か関係があるとしか考えられないかな？今はアルバスの記憶もすっ飛んでいるしぼくの記憶もない。記憶と一緒に重要なことも忘れた……一体何が？)
自分の知らない自分。今回の出来事の発端は確実に『ソイツ』のせいだろう。

昨夜見た夢ももしかしたら……。自分の『内側』にもう一つの人格があることを想像するだけで背筋に冷たいものを感じる。いつか、もしかしたら自分が盗られてしまつよつた気がして恐怖と戦慄を覚える。かぶりを振つてこの考えを頭から締め出す。

(今から考えてもしようがないさ……そういうことにしよう)

「そんな説明は後回しでなのは、シャワー浴びて来な？学校とか汚れたままじゃあまずいだろ？」

「うーん、やっぱり？コーノ君がわたしが起きてすぐに検査しちゃつたからすっかり忘れてたよ……」

コーノの説明をまじめに聞いていたみたいだしけつこいつ今回の騒動にも戸惑つていなによつた。こいつの志の強さが彼女のこところなのかもしねりない。

「じゃあ行つてくるよ、そだーシャワー浴びたらこの部屋で寝ていー？」

「自分の部屋があるじゃないか……そつちでいいじゃん」
いきなりとんでもないことを言い出す。

「だつてこつちの部屋のほうがポカポカしていて気持ちいいよ？布団もあつたかいし

「だめです。自分の部屋にしなさい」

「ぶうー、けちいーと文句をたれながら部屋のドアを閉めたら少ししてまたドアの開く音がする。なのはの部屋は食卓と同じようにドア

－リンとちょうど反対だ。

どっちが年上かわからないですねとユーノが呟くが、アーリンは顔をゆがめる。

「じゃあこれからぼくは朝食作りも手伝うのとついでにパンか何かとつてくるからここで待っていて？」

「わざわざすみません」

「別にかまわないけど敬語をやめてほしいかな、そういうのってなんだか苦手なんだ」

「わかった。そうするけど君の検査はいつからやることにしようか？できれば少し時間をもらつて詳しい検査をしたい。なんでバリアジャケットが『ジユエルシード』をのみ込んだのか、君自身の能力についてなんだけど……」

「じゃあぼくが学校から帰つてきたらでいいか？今からはもう手伝いをするから時間の余裕がないんだ」

わかつたとユーノが返事をしてうなずいたのを確認してバリアジャケットをしまいドアを開けて部屋から抜け出した。

「そうだ……どこでのデバイスを手に入れたのか聞いてないや。まあ後になつてからゆっくり聞けばいいか……」

ユーノはそう言ってから目を閉じる。気になつたことが多くてきのうはうまく寝れなかつたから睡眠不足ですぐにまた寝れそうだ。それからまもなくアーリンが来てパンを置いていったのだがユーノは気付かなかつた。

それからはいつもの朝と同じように朝食を食べ、2人は学校のバスに乗る。

何も変わらなかつた朝食が変わつたのは2人だけだつた。

変化と覚醒（後書き）

今日は戦闘シーンかと思ひきやの構成です。しかも長いし下手だし
……
次はなのはバーチャーリンの模擬選にしようかな
……

兆し（前書き）

更新遅れてしません。

今後もこんな感じだと想つので気長につきやつてください。
あと、簡単でもいいので感想がほしいです。どうかやる『返』があつ
たらよろしくお願ひします。

今日のクラスでは朝からあの通学路の凄惨な状況でもちきりだった。「だからよー、おれが起きた時には父さんも母さんもいなかつたら外に行つてたら通学路がめちゃめちゃになつていてよー、2人もそれを見に外に行つていたんだぜ息子を放つておいてな」

先ほどからマサが今朝の事態に熱弁をふるつていて。当事者として気が氣でいられないアーリンだつたが今日はきのうの約束通りマサ立ちとお昼を食べている。なのはたちはすでに屋上に向かつた。朝のうちに口が滑らないように注意しておいたがやっぱり心配だ、もしされたりしたらアリサのコウゲキに耐えれるか……

「おれの意見じやあ、今回の事件の犯人はどつかにいるトチ狂つた殺人鬼やテロリストじやない、もつと超能力的なものを持つた奴らだ。殺人鬼が人を殺さないわけないしテロリストにしても誰も見ていないときに『花火』を上げたつてしようもないだろ?だから、答えは超能力者が町をぶつ壊したんだ……大体こんな感じだろ、な、アーリン?」

（どうしようか、今朝ユーノに教わつた念話つてやつで確認してみるか……）

「おい」

（試してみるか、ユーノとは通じたけどなのはに繋がるかはやつてみないことには……）

パンツー!

「痛! ! なにすんだよ! ?」

「やつと帰つてきたか、お帰り。お前今までずっと上の空でおれの話聞いてなかつただろ?」

マサがどこからか取り出したハリセンをしまいながらつた。アリサといいこいつといい一体どこからハリセンを出す?

「わかつたからハリセンはやめる。今ので脳細胞が一体いくつ死ん

だ」とやら……」

「本当だな？ おれの意見は、かくかくしかじか」

（なるほど……本当に直感だけに頼つてここまで解つたんだから、相変わらずこいつはすごい）

「でどうよおれの推理は……いい線いつてるだろ？」

「確かに言いたいことはよくわかつたけど、超能力者が通学路を壊した理由がわからない。意味もなく壊す理由がないのは『超能力者』だつて同じだ」

マサは眉間にしわを寄せて唸つて何かいい案がないのかと考察しているのだろう。少し経つて唸るのをやめた。

「宝物でも集めてるんじゃない？ だいたいこういうバトルモノはそういうのが『お約束』つてやつだし……何の事だかわからないけど（こいつの将来は大物だな、間違いない）

直感だけでジユエルシードの存在を感じ取つたマサの感性は犬の嗅覚にも引けを取らないだろ？

「仮に超能力者がいたとしてもそいつらはなぜ通学路を壊した？ 壊れたままじゃあ、おまえみたいに直感のいいやつに捕まつてしまつ恐れがあるからおれなら絶対に直してからその場を離れる」

今度は眉間にしわを寄せずにゆっくりと目を閉じて考えると、うか瞑想しているというかそんな表情をしていた。

「それもそうだな……納得はできないがこれ以上はどうしても証拠が足りないしそうこいつにしておこう」

その後も数分間、アーリンは特に危ない話題も踏まずにマサたちとの昼ご飯を食べることができた……

放課後、アーリンはユーノの検査を受けていた。今朝と同じアーリンの部屋だが、なのはは例によつて塾があり帰宅していないため男一人だけだつた。2人ともベッドの上に腰かけていた。

「すこしだけなのはと魔力の質というか、形というかそんなものが違うかな……それに一般的な魔力よりもなんか『冷たい』ような感覚があつて。言葉だと難しいな……」

「つまり、レアスキルってやつか？学校でいつていた？」

「いまは魔力を測定する段階で全身から光が滲んで、ホタルみたいに発光していた。

「それはもう少し後の検査でわかると思つけど……でた、推定魔力は平均ぐらい」

「平均つて……」

「まあまあ、もとはなのはが強すぎただけでこれくらいでも十分強いほうだよ……次にレアスキルだけど、特に何もないね」

「そうか……ケツ「一一般人なんだな、ぼくつて……」

アーリンが複雑そうな口調でつぶやく。

「でもまだアルバスの機能とか解らないこともあるし、そっちのほうで何があるかもしれないよ？」

今朝、偶然にもアーリンのプライベートな部分を聞いてしまったユーノには検査で何もわからなかつたから落胆でもしているのではないかとあわてて言葉をつなぐ。

「そうだね、といつたきりアーリンは口を閉ざし、ユーノには何も言えなかつた。2人の間に沈黙が流れる。

「まあ、気にしてもしょうもないか……そういえばユーノ、お前昼ご飯はどうした？まさか食べてないとか？」

「大丈夫。この体は小さいから燃費性能もいいから朝のパンだけで十分だつたし」

ならないんだけど……と言いながら時計に目を向ける。午後5時十分前だつた。

「やばい、5時から恭也と練習試合があつたんだよー？」

悪いユーノと口で断わつてあわてていつものジャージに着替える。

「後のこととはまた夜に、その時にはなのはも帰つてきると思つし、じゃあ……」

そのままアーリンは家の裏にある道場に向かつて駆け出した。

「遅かつたな」

アーリンが道場に付くと恭也はすでに準備完了の様子で静かに座禅を組んでいた。

「悪い、直前まで忘れていたから……」

「全くだらしないやつだ、と言わんばかりにため息をつく。恭ちゃんだつてつさつきまで忘れていたじゃない。わたしが思い出さなかつたら……」

「余分なことは言わないでいい。それよりさつさと準備しろ、この間の結果はまぐれだつたと言つことを証明してやる」

ハイハイと返しながら愛用の木刀を手に取る。走ってきたから体は暖まつていたが、腕の関節をほぐすようにストレッチし最後に軽く深呼吸。肺の中の酸素が入れ替わり頭の中から余分な思考が消え戦闘に特化した状態になつたのを確認し、審判の美由紀に声をかける。

「よし！これより恭ちゃん対アーリンの練習試合を始めます。両者、礼！」

恭也とアーリンが道場の中心に向かい合い礼を交わす。

互いに3歩離れ、エモノを構える。

恭也はこの家に伝わる伝統的な『小太刀二刀流』木刀を正面に突き出すよう構えるというシンプルな構えだ。

それに対し、アーリンは身の丈ほどもある大太刀の木刀を抱えるようにして正面に構える。

「では……、試合開始！」

開始の号令とともにアーリンが疾風のように恭也に向かつて駆け出し上段から大立ちを振り下ろす。恭也は右の小太刀でアーリンの大太刀を受け流し、左の小太刀で神速の突きを繰り出す。

「ハアッ！」

小学生相手に大人げない……といわれかねない気合の一閃、小太刀の先から空間が割れんばかりの威力があった。しかし、アーリンは身をひねってかわしそのまま勢いを保ちながら姿勢を低くする。腰と足にわずかにタメを作り、下段から振り上げるように解き放つ。「オラア！」

木刀を交差させてしのいだが、恭也はバックステップでそのまま距離をとつた。アーリンはさらに距離を詰める。腰ごと大太刀をひねって先ほどよりも大きいタメを作り、突きを繰り出す。恭也はその衝撃と威力を受け流し、冷静に処理し隙だらけだったアーリンの腹部を柄でえぐるように攻撃する。

「ハア！」

「！？！？」

そのまま腹部に打ち込まれて終了かに見えていたが、アーリンは空中で前転するようにしてかわしそのまま距離をとつた。

2人の間でいくらか剣劇は続けられたのだがなかなか決着はつかなかつた。やがて、審判の美由紀の合図でこの結果は持ち越しになつた。

「試合終了！もう規定の15分は過ぎちゃつたから両者引分けということで」

アーリンは道場の床に大の字になつて寝つ転んだ。

「くつそー！あと少しで勝てたかもしれないのにー」

「今回おれだつて冷静さ。そう簡単にはやられないし、まだお前には無駄な動きが多いからな」

悔しそうに「うう～」と唸つる。

「まあ、アーリン君もあの恭ちゃん相手にここまでやれるよつになつたんだからすごいいよ？まだ一年ぐらいしか経つてないのに」

美由紀がアーリンを励ますように言つた後、ここにいなはずの4人の声が聞こえた。

「恭也はだいぶ冷静にさばけるようになつたみたいだし、アーリン

は無駄な動きや剣筋を鍛えればもつと強くなれるだろ？…… 2人とも、強くなってきたなあ

「やっぱり、アー君にはセンスがあるのかな？わたしはあんなに飛んだり跳ねたり絶対できないよ」

「むしろ、あんなに跳ねたりてるのは田が回つたり体力がつきないほうが驚異的じやない？もちろんそれで戦うのも同じぐらい驚異的ね」

「そうだね……さすがにあれ（吸血鬼の私でも）は真似できないだろ？しね」

「なんで士郎はともかくなのはとアリサとすずかがいるんだ？塾があるんじやないの？」

士郎にしても翠屋があるはずだし、お店を無人にしてもいいのだろうか。

アーリンが立ち上がり4人のほうに向きなおす。

「翠屋は桃子に代わつてもらつて休憩を兼ねて見に来たんだよ。なのは達はすこし早く塾が終わつたようだけどね」

「にやはは……で、アリサちゃん達は塾でユーノ君の話題になつて打ちにいるよつて言つたらお見舞いに行くつて言い出したからついてきて、お店にいたお母さんがアー君が試合してゐつたから見に来たの」

「今朝のわけのわからない事故での子を預けた動物病院が崩壊して逃げてきたらしいのね……」

「崩壊つてアリサちゃん、壁が少し壊れちゃつただけなんだから……でも不思議だよね？あの動物病院からなのはちゃん達の家つて一番遠いのに逃げてくるし。距離的にはウチやアリサちゃんの家のほうが近いのにな」

なのはが引きつった笑顔を作つた。

「あいつならぼくの部屋にいるからなのはに案内してもらつてくれ。ぼくは道場の片付けとシャワーを浴びてからそつちに行くから」

わかつてること、早くしなさいよ、アリサが言つたのを耳にして

アーリンは道場の片付けに入り、3人の影は夕日の中で家のほうに消えていった。

先に道場の後片付けを開始していた2人に交じってアーリンもモップを持つ。長年の稽古でつやつやになつた木の床の上を乾拭きで黙々とふきあげるだけなのだけつこうな広さがあるので何度も往復しなければならない。試合のあつた場所だけで十分な気もするのだが昔から稽古が終わるごとに道場の全面を掃除していたらしく、今でもその伝統を守つてゐる。こののを美由紀から聞いた。

「よし、これで終了……！」

最後に参加したアーリンが最後の列を拭き終わりモップを片づける。

「やっぱり3人だとこういふのは早いね。恭ちゃんは一人だけの時とかはさすがに広すぎだつたしね」

審判役だけの美由紀がしみじみと言つた。

「父さんは参加できないことが多かつたし、こう考へると確かに役には立つてゐるアーリンは」

「またそんなこと言つてー。それより、アーリンは早くシャワー浴びてなのはの達のところに行かなくつや。後の戻りはわたしたちだけでも十分だし」

わかつた、そうするとだけ答えてアーリンは家に戻る。後ろから何か会話が聞こえてきたがほとんど聞こえなかつた。

「アーリンが家族になつてなのはと同じくらい喜んでたじやない？ 男兄弟ができるって」

「そんなこと言つた覚えはないぞ！？」

「すくはしゃいでいたじやない？ 今日だつてリベンジしたぐらいだし、結構気に入つてるんでしょ……」

「別にそういうつもりじゃあなくてあれは、兄貴としての威厳の問題で……」

その日は結局、ふたりは遊びに来て、今度の休日にまたユーノを交えて遊ぶことを約束して帰つて行った。高町家の人にその時ユーノのことがばれてしまつたが返事一つで承諾した。2人できちんと面倒をみるという条件付きだつたが。

その日はそれで終了した。アーリンが風呂に入ろうとしたとき、なのはが一緒に入ろうと言つて出し恭也に半殺しにされかけたのは、また別の話。

翌日、ユーノが張つた探査魔法にジュエルシードの反応が出たので現場に急行。そこで巨大になった子犬を発見し、これを撃退。前回に比べあつけなく終了したのは、一人が一通りの知識を覚えてのに加えごり押しの攻撃が功を奏したからであり、アーリンはともかくなのはと2人のコンビネーションはまだまだユーノにだめ押しされた。そこでふたりの魔法の訓練をすることが挙げられたのだが……。

「訓練するのは仕方がないとして、こっちのほうはどうしよう？」アーリンは自分のバリアジャケットを見つめる。ふたつになつた蠢く青い模様があつた。

その後、話す暇もなくアーリンとなのはは「昼休みが終わっちゃう」と叫びながら小学校に飛んで行つた。

ユーノは1人で家に帰つて行つた。

昨夜から來た世界「地球」魔法の文化がないのには驚いたけどそれ以外は衛生的で安心して眠れるいいところだつた。きのうは丸一日分移動に時間を使つてしまい何もできなかつたが、今日からちゃんとお母さんの『探し物』を探さないといけなかつたのに、目的地に向かう一つの反応を発見した。

（この世界には管理局はおろか魔導士もいなはずなのになんだろ
うこの反応は？）

わたしと使い魔のオオカミの姿をしたアルフは先回りをして認知障害の魔法をかける。近すぎると2人にはれてしまうかもしないので一定の距離を離れ、2人を待っていたが途中で使い魔らしい動物と合流してちょうど巨大化し切って暴走を始めた子犬と戦闘開始した。

「ふうん……ひとりは魔力が強そうだけど、もう一人は大したことないね。2人ともフェイトの敵じゃないよ」

「そうかもしだいけど、油断は禁物だよ？茶髪の子まだ本気を出していないだけかもしないし」

黒髪の子が強大化した子犬に接近し、ひと太刀を決める。ひるんだのだろうか、一瞬動きが止まりすかさずもう一人が砲撃で子犬の頭を打ちぬいた。非殺傷設定のおかげで子犬は無傷でそばにいた飼い主の人とともに気絶した。

「今がチャンスだね、このままあれをいただいちゃ おう」

子犬の体から青い光が漏れてお母さんの『探し物』が現れる。わたくしたちも彼女たちも同じものをを集めている以上、いつかは敵対して『探し物』を奪い合うことになる。だったら、早いうちからこちらに流れを引き寄せて素早く回収しきつてしまつのが一番だろう、あの子がまだ未熟なうちに……

「そうだね、あっちがまだ気付いていないうちに……」

認知障害の魔法を解除していっきに『探し物』を回収しようとした瞬間、その信じがたい情景が目に張り付いた。

強い光を放ち目を一瞬逸らしだけだつたのに。わたしがこの町に張つている『探し物』のための探知魔法は完ぺきだつた、なのにすっかり消えてしまつた。探知魔法からも視覚からも。

「なつ、一体これはどういうことだい！？ あたしの魔法からも目からも一瞬であれを消しちまうなんてありえない！！！」

アルフも驚いている。当然だ、わたしよりも補助系の魔法は上手

なようにわたしが作つた使い魔なんだから。でも、そうなるとあれはどこに？なにか特殊な空間転移の魔法でも使つたのか？でもよほどのものでない限りお母さんが作つてくれたあの魔法が追跡できないわけがないはず……

「くそつ！……どうするフロイト？あの連中にあれをどうせつたかぶちのめして聞き出すかい？」

「いや、ちょっとまってあの黒髪の子のバリアジャケット、青い模様が一つ増えているように見えない？」

「いまにも襲いかかりそうなアルフを抑える。

「そう言われてみれば……でも一体？まさか、あれを取り込んだのか？バリアジャケットが？そんなことができるのかい！？」

「わからないけど、もしかしたら茶髪の子よりもあの黒髪の子のほうをマークしないといけないかもしねないね」

向こうの話も終わつたのだろう。2人がバリアジャケットのままだこかに飛んでいいて、使い魔と別れた。

「わたしたちはこのままあの二人も追いかけて今のあれを取り返すかい？」

「いや、今日は別のものを探しに行こう。先に集められるだけ集めて後から取り戻せばいいしあの黒髪の子の能力もよくわからない以上手な手は打てないし、まだそんな無茶をして集める段階じゃないよ」

解つたとうなずいて、アルフがわたしの後に付いてくる。さあ、早く集めちゃおう、お母さんの探し物を……

金色の髪の少女とオオカミは寄り添つて近くにあつた森の中に消えた。

兆し（後書き）

初めにも書いたんですが感想を、お願いします。マジで。

ファースト・コントラクト（前書き）

今回はものすごく遅れてしまつてすみません。
次回からま「ツコツやつて行きます。

ファースト・コンタクト

休日。2人ですすかの家に来ていた。

視界いっぱいに広がる城壁のような門と壁、アーリンが以前に怪獣みたいだと洩らしていたがなのはにはあまり伝わっていないようだつた。門に備え付けられているインター ホンを押して来訪を告げる。怪獣の目がぎょろりと動いて2人をとらえる。

すでに2人のことが伝わっていたおかげですぐにメイドさんが門を開けてくれた。

「お待ちしておりました。なのは様、アーリン様、すでにアリサお嬢様はお着きになっています」

「ここにちは、ノエルさん。わたしたちが最後なんですよね？」
「そうみたいだね、でも四人しかいないから遅刻とかは気にしてなかつたけど……」

ノエルに案内されて2人は離れた本邸に向かう。広大なのに手入れが行き届いている庭園の道を抜けて数分間歩き続けてようやく目的地の本邸に着いた。怪獣の胃袋だろうか。さらに進んでもうずか、アリサのいる裏庭に着いた。

「ヤツホー2人とも、久しぶりだね？」

「遅かつたじやない？ちゃんとその子も連れてきててくれたようで安心したわ」

2人の座っている机にはすでに紅茶とクッキーが用意されていた。
「こいつが家を出る前に消えて探してたんだ」で

アーリンがわきのかごを持ち上げた。中にはユーノが入つてゐる。

「（悪い、ユーノ。今日1日がんばつてくれ）」

「（わかつてゐよ。今回はしょうがないしね……）」

「（ごめんね、わたしが少し寝坊しちゃつたから）」

3人が念話で会話していると、

「じゃあ2人とも座つて？今日はアリサちゃんが手作りクッキーを

作ってくれたから

なのはとアーリンが驚いてアリサに田に向ける。

「べ、別にやつてみよつかなって思つただけで、他意はないんだか

うう……」

「ふいっ、と、そっぽを向く。

「じゃあ、ひとつもらおつか……」

「いっただきまーす！」

さまざまな形に焼かれたクッキーのうちの一つを口に放り込む。サクサクな舌触りとバターとミルクのほのかな甘みが口に広がった。

「うん、うまいんじゃないか」

思った感じをそのまま口にした。

「いい感じだと思うけど、少しパサついてるかな？」

喫茶店が実家の少女の評価は辛口だった。

到着してからじまらぐの間、アーリンは会話の輪に加わっていたがさすがにもう話すことは憂鬱だなと思つて適当な理由をつけて1人で裏手の森に散歩に来た。

「女子つていうのはいつまでも話してただけで満足できるんだからな……」

誰ともつかない独り言がこぼれる。

コーノも誘おうかと思つたが、他の猫に追われて（遊ばれただけだが）ぐつたりしていた。

まあ、楽しそうだつたからいいか。

しばらく森の中をひとりで歩く。暖かな田の光とさわやかな風が心地いい。

「やっぱり、いこいのはいいな……」

どこかに座つて昼寝でもしようかと思つたらアルバスに反応があ

つた。

『申し訳ないのですが、マスター。魔力反応が近くに一つあります。どうされますか?』

「ほんと? せっかく休んでたのに……まあ、なのは達も気付くだろうし、ぼくたちだけでとりあえず行ってみよう」

『了解しました』

目が覚めるような蒼いバリアジャケットを纏う。

「じゃあ、どうちにいけばいいのかな?」

「反応は……こっちでいいんだよね、アルフ?」

「おうや、間違いないよ、フェイト」

わたしたちは今どこかのお金持ちが持つている大きな屋敷の裏にある森に来ている。探し物の反応は森の中から。空から結界を張つてこちらの姿を見えなくして探しているのだけど細かい部分は結界を解いて地上で実際に調べないといけない。

「今回からはあの子たちとも遭遇する可能性が高いし、それだと見つけなくちゃ」

できるだけ目立つようなまねはしたくない。

あの子たちが管理局の人間なら遭遇でもしたらこちらが一気に不利になる。できるだけ早く、多く、確実に。

そう、お母さんのためにも、わたしが頑張んなくつちや……

「でかいな……」

『そうですね……。これはこの世界の原住生物なのですか?』

「まあ、ね。こんなに大きいのははじめてなんだけど」

強大な牙は、獲物の肉を食いちぎるため。命を潰えさせ自らの糧

にするべく進化したもの。

強大な爪は、獲物を逃がさないため。大地を駆け、獲物に食いこみ逃がさないためのもの。

つぶらな瞳は見る者の心を癒し、ふわふわの体毛はマシユマロのようにな柔らかそうだ。

そこにいたのは巨大化した子猫だった。

「ぼくが知る限り、猫の巨大化に成功したニユースも新種の巨大猫が発見されたとも聞いてないから、やっぱりジュエルシードの影響？」

『でしょうね。ジュエルシードの魔力を利用してそこまで巨大化することは理論上十分可能です』

「どんな原理なのか気になるけど……とりあえず攻撃する？」

『いいえ。マスターはお二人が来るまではなにもされないのが一番よろしいと思います。マスターに万が一があつたらあの動物よりも厄介なことになりかねません』

「やっぱりそういうと思った。僕じゃ危ないからつて止めなさいって」

一度息を吸つて、しつかり吐く。

『申し訳ありません』

しばらくだまつて猫を観察する。毛繕いをするものの本の性格がおとなしいせいがあまり暴れず、その場で昼寝をしていくだけだった。一番驚いてるのは猫のはずなのに、一番どうでもよさそうなもの猫だった。

「このままじゃあ、何事もなく終わるね……なのはがちょっと遅いのが気になるけど」

それまで黙つていたアルバスのこえがあがつた。

『マスター、魔力反応が……』

アーリンは振り返る。普段通りのはずだったが、どことなく遅い感覚があった。

『ですがこれはお一人のうちどちらでもありません……』

黒衣のB～を纏い、手に持った武器を振り上げている。

刃は、猛禽を思わせる鋭い爪のような三田円形。

『……全く未知の反応です』

あまりに突然現れた猛禽の少女は、美しかった。

新雪の白さを持った肌。

宝石を思わせる赤い瞳。

そして、風を受けて広がる金糸の髪。

ああ、こんなときでなければ、きっと見とれていただろう。

やがて、彼女が持つ三日月が、アーリンに向かって真直ぐ、墮ちた。

「あれだ」

私は今回の目標を発見した。すでに子ネコに取り付いて巨大化している姿を上空から確認できた。そのそばにあの子も発見した。

「やつぱりいた。」

先日と違つて青いB～の子は一人で猫のそばに立ちつくしているようだつた。

「行くよ、アルフ。まずは先制攻撃」

もうひとりの白い子はまだ見当たらぬが合流されたらこちらが不利になつてしまつ。一人になる前に片一方は戦闘不能にしないといけない。

「わかった。フェイトの敵じやないと思つけど、一応気をつけてね

？」

「わかつてゐる。バルディッシュ」

『Y e s - S i r』

一気に加速してあの子の後ろに飛び込む。私がその背中に斬撃を加えようとした時、振り返つてこちらを見た。顔が驚愕に染まつていた。

『ごめんね……』と心の中で呟いて。そのままバルディッシュで切りつける。

ギイイン！！

だが、肉がつぶれる感覚と音がなかつた。

「危ないな……いきなり後ろからなんて。君はどこの誰？」

いつも間にか青い子の手には同じ色の剣が握られていて、私の完全なはずの奇襲を受け止めていた。

「ウソ……」

この子は直前まで私の接近に気がつかなかつたはず。ではなぜ、私の奇襲は成功しなかつたのか……？

「匕つちの質問には、しつかり、きつかり答えてもらうよー」

じゅらが自問自答している隙に左足のけりを放つてきた。それを後ろに飛んでかわす。

『グダグダ言つてられない。ここからは、正面切つての一騎打ちで！』

着地してすぐに前に踏み込んで今度は切り上げる。

だがあの子も相応に腕が立つのだろう。紙一重でかわし、剣で私の顔めがけて突いてくる。

「！？」

私も紙一重で突きをかわす。

『この子は相当接近戦が得意のよう。なら少し離れて攻撃すれば……』

かわした勢いのまま一気に後ろに距離をとる。が、

「ハアッ！」

私が後ろに下がつたところ、じゅらがもう一回剣で突いて青い魔

力光の斬撃を飛ばしてきた。カミソリのような鋭さがあった。

「クツ」

また私は紙一重でそれをかわす。そのまま、せりて距離をとる。

「あれもかわすか。結構すばしっこい」

10㍍ほど距離ができるが、まだ油断はできない。あちらには、まだ隠し玉があるような気がする。

「……あなたの持っているジュニルシードを渡してください。そうすれば危害は加えません」

「いきなり襲つてきた君がそんなことをいうの？ ていうよりも、僕はこれについてはよくわかんないし、いきなりよこせって言われても困るというか……」

ウソはついていそうにない顔だったがそれでは意味がない。私は、全てのジュニルシードを一刻も早く集めなくてはならないのだ。

お母さんのためにも、早く。あの優しかったお母さんに会つたために……

「それなら、力ずくで奪います……！」

私は左手をかざして魔方陣を呼び出す。自動追尾の性質をもつた魔法を使うためのものに魔力を込めていくつか魔法を蜂起させる。

『Fire』

魔法が流れるように一気に襲いかかつていた。

「問答無用つてわけか！」

左に飛んでかわそうとするが魔法が獲物のあの子を追いかけて左に折れる。

「自動追尾つて、そんなのもあるの……？！」

今度は上に飛ぶ。魔法もそれに合わせて上に飛ぶが青い子は自分に直撃する寸前にその魔法を切りつけた。

その時、魔法はまるで凍つてしまつたかのようにあの子の魔力に包まれ、砕けて、散つた。

『今だ！』

気を取られている一瞬の隙を突いて今度は攻撃力、弾速がともに

高い魔法である子を狙う。

『Fire』

打ち出された魔法は先ほどとは比較にならない破壊力を伴つて獲物に喰らい付いていった。

『今度こそ……、あの子を戦闘不能にできるはず!』
だが、狛犬が獲物に食いつく瞬間、上空からの桜色の砲撃が、私の魔法に直撃してかき消された。

「アーチ君!」

この間確認したあの白い子だった。

「なのは!? ナイスタイミング! 」そのまま、ジュエルシードのほうを任せた!」

なのはという子がそのまま空から巨大化した猫のジュエルシードを回収するのだろう。

「そうは、させない!」

今度はなのはという子に向けて魔法を放とうとするが、やはり青い子がこちらに向かつて切り込んでくる。

「なのはには、指一本触れさせない!」

魔方陣を消して斬撃を受けとめる。

『さすがに一人分を相手にするのは無理。退かなきや』

剣の力を受け流し相手の姿勢を崩す。そこから回つて柄で背中を攻撃するが剣で受け止められる。が、そのまま距離をとる。

「逃がすか!」

先ほどと同じように魔法を放つてきたが、ナーフまで長い射程ではないらしくすぐに距離を稼げた。

『次回からはもっと注意してからないと……』

毎回このように邪魔されてはいつまでたってもジュエルシードは集まらない。

そうなつてしまえば、お母さんも戻らない。帰つてこない。

『そんなの、嫌、だもんね……』

私はそのまま戦域を離れていった。

「逃げられた」

なのはが現れてすぐに撤退したが、あの子もジュエルシードを集めるならまたどこかで戦うことになるだろ?、けど……

「あの子はどうして?」

危険物であるはずのジュエルシードを集める?

もしも以前ユーノーが言っていた管理局といつものならあんな強引なことはしないはず。法にそむくのは、こちらのだから堂々と所属なり何なりを名乗つて合法的に取り上げればいい。そうしないってことは、やっぱりそれなりの理由があるからで。

「今回の黒幕かもしれないね」

『確かに、あのような年齢の少女が特別な理由なしにこんなことをするとは思えません』

僕たちだつてユーノーを手伝つたためにジュエルシードを集めている。では、彼女は自分のために集めるのか。それとも別の誰かのために集めるのか。

「本人に聞くしかないか……」

しばらく物思いに耽つてゐるとなのはが帰つてきた。

「今回はちゃんと封印できたよ?」

『Yes』

レイジングハートの赤い球体に「Completed Number 2」と表示された。

「今回は私でも普通に封印できたんだ。どうしてだろ?」

小首をかしげる。

「それよりアーリングが無事でよかつた」

いつの間にかなのはの肩に乗つていたユーノーが言つ。

「おまえは今までどこに行つてたんだ?」

「実はあの子の使い魔と交戦していたんだ。なのはには先に向かつ

てもらつて

「なるほど。じゃあ今回到着に少し時間がかかったのは、そのせい

？」

「にやはは、実はコーノ君がアリサちゃん達に捕まつてなかなか離れられなくつて」

「どうか、なら仕方ないな」

アーリンとなのはが声をあげて笑う。

「僕はたまたもんじゃないけどね……」

げんなりとした口調のコーノだつた。

「じゃあ、もう行こう？みんななかなかアーリン君が帰つてこなつて、心配してたし」

なのはがアーリンの手をとつて歩き出す。

「あの子のことは聞かないの？」

つい先ほどまで交戦していた少女のことについて一人とも聞いてこなかつたので、ふと疑問に思つた。

「それはまた後で。おいしいクッキーがあつたから、それを食べながらにしよう？」

そうこうことねと納得しながらアーリンは元の場所に戻つていつた。

「ここはこの街のどこにでもありそうなマンションの空き室。誰にも怪しまれないように認知障害の魔法で仮のアジトにして寝泊まりや補給をするわけだ。

「不覚だつたね。まさか、ファイトより早い奴がいるなんて

「そうだね。でも次回からはしつかり回収しなくつちや」

アルフの言葉にファイトが小さくうなづく。

「でも、ほんとに「めんよ、あの白いのを通しちまつて。あいつが

いなければ回収できたんだろう?』

『フエイトが受けたかすり傷を回復魔法で癒しながらアルフが問う。もともと家具が少なかつた中で唯一このソファーだけは役に立つ。基本的に寝るのも、インスタント食品で食事をするのも、こうして覓ぐだけにも使えた。』

『そんなことない。あの青い子は強敵だった。一人だけで倒すのは時間がかかりすぎる相手だよ』

『でもどうしてはじめの奇襲をかわせたのか。それ以外は大体互角。完全に後ろをとったのに』

『本当にそれがナゾ。今度からは魔力量が多くて危険かもしれないけど白い子を狙っていくしかないかもしれない』

『少し横になると黙つてフエイトがソファーに寝つ転るとすぐに寝てしまつた。やっぱり、今回の戦闘はそれだけシビアなものだつたのだろう。』

『フエイト、あんな女のためにどうしてここまで頑張るのかしら?』
年相応のあどけない寝顔のフエイトに備え付けてあつた毛布をかぶせる。

『あたしはフエイトの使い魔だから言つことは聞けるが。でも、もうそろそろ堪忍袋の緒が切れそうだよ……』

『顔をそつとなるとアルフも同じよつに毛布をかぶつてそのまま、床で寝た。』

温泉旅行と交わる思い（前書き）

相変わらず長い間お待たせしました。
待つてくれた人には感謝の言葉でいっぱいです。
もういなきもしませんがwww

温泉旅行と交わる思い

謎の襲撃者とファーストontactをした翌日。高町家ではいつもと同じ朝を迎えていた。

例の「」とく早起きしてアーリンは朝の鍛錬に出ていた。

「はあ…はあ…」

膝に手をつきながらも呼吸を整える。

「今日のアーリン君は頑張ったね。わたしと恭ちゃんのペースについてきてたし、大丈夫?」

「……大丈夫」

いつもは士郎がアーリンをリードしているのだが仕事の都合で今朝はついてこれなかつたため、2人のペースで走つたのだが……。

アーリンの様子を見かねた恭也が言った。

「今日はもうやめておけ。そんなんじゃあ、学校に行くまでにぶつ倒れるぞ」

「そうだね、無理して倒れたら元も子もないし、今日はこれにてお疲れ様だね」

2人でごり押ししてくる。

「……わかった。じゃあ、見学してる」

一度言い出したら止まらない。ので無駄な抵抗はせずおとなしく降伏した。

「そういうことで、今日はわたし対恭ちゃんだね。よろしくね?」「お手柔らかに……」

2人は道場の中央に立ち向かい合わせになり、構えをとる。いつもの2人からは想像できないほど、空気が静かに、そして冷たくなる。離れた場所に正座しているアーリンにも張り詰めた空気が伝わってきたほどだ。

そのまま少しの間だけが劇場の空気のようない人の静寂に意識が引き寄せられる。

「（そういえば……）」

時は流れ出す。構えの静から攻撃の動へ場の空気が変更された。

「（）の一人つて、どっちが強いんだろう？～）」

見学は終了しなのはを起こしていつものようにシャワーを浴びた。
今は朝食。

「昨日の町内会で先日の道路崩壊事件の話になつたんだが、警察でも犯人はつかめてないそうだ。あの崩壊具合じやあすぐにでも見つかると思つたんだが」

「それつて、ガス爆発つてこの間、聞きましたけど……」

「あの辺にはガス管は通つてないんだ。それに時間軸上では深夜の出来事、つまり、誰かが爆発の音で起きなくてはおかしい」

士郎と桃子が昨日の町内会の話をしてくる。約2人は内心ヒヤヒヤなのだが、誰も気づかない。

「それは深夜に限つたことじやないと思うぞ。あれだけ崩壊してたらどんな方法だろうと誰かが起きていてもおかしくないはずなのに。問題はだれが壊したかじやなくて、どうやつて壊したかだな」

「あれ、なのは、どうかした？顔色悪いよ」

「う、うんうん大丈夫だよ！いつも通りの私だよ！」

「……」

「これは、だめだ。

アーリンは一瞬だけ素に戻つた。

「みんな注意してくれ。どこでどんな危険な人物がこの家を襲うとも限らない。わたしたち町内会でも警戒はするが用心に越したことない」

士郎がコーヒーを啜る。

「犯人は特定できてはいないがあんな危険なことをするやつだ。夜

道を一人で歩かない、夜の外出を控えるを徹底してくれ

土郎の忠告に家族全員で返事をする。

「特に、恭也とアーリンは犯人と思しき人に出会ったとしてもいきなり切りかかるな。わたしに連絡するか、警察に連絡してから犯人が確実に捕まる状態になつてからだ」

「わかつてゐるさ、それくらい

「はーい」

「じゃあ、暗い話はもうおしまい。楽しいお話をしましょ？」

「楽しい話つて何のこと？」

「実はね、アリサちゃんのお家のお母さんとすずかちゃんのお家のお母さんと一緒に温泉に行く話をいていてね、今度の休日なんかがちょうどいいんじゃないかなって。その日はちょうど喫茶店も定休日だし、あちらの家族も休暇みたいだからちょうどいい三重点の日なの」

「なるほどー。盛り上がりそうだね。わたしは勿論出席するよー」

と美由紀が、

「おれも大丈夫だ」

と恭也が、

「忍さんに会えるもんねー」

「うるさいーー！」

「わたしもー」

「ぼくも大丈夫、一緒に行けるよ

となのはとアーリンが、答える。

「そうよかつたわ、みんなで一緒に行けて」

どこか感慨深げにつぶやいた桃子。

いつもはどこかクールであまり感情が表に出ない土郎がやさしく微笑みながら言う。

「わたしたちにも久し振りの休暇だ。楽しみだね？」

「ええ……」

土郎と桃子が熱っぽい視点を交じらせる。

「はあ……。で、どこの温泉なのぞ、母さん?」

恭也の質問に桃子が答える。どうやら温泉はここからばかり離れすぎることもなく遠すぎる」ともないような郊外にあるようだつた。そこにある温泉宿で一泊二日の小旅行をするのだ。

「（マスター、ジュエルシードの件についてはいかがしますか?）

休日。

アーリン達は郊外の温泉施設に来ている。

いまは、小学生組で旅館の温泉に向かつていた。

「温泉楽しみだね」

「そうね。それに私の家は洋館だから、ここにう純和風の家は新鮮ね」

あとで探検しましょ?アリサが言つ。

「そうだねつて、どうせ大人は大人で楽しんでるんだからぼくたちはぼくたちで楽しもうか」

しばらく木材独特の匂いのする廊下を行進する。途中、恭也と美由紀とも出会い一緒に温泉に向かつた。

しかし、奇妙な1人の女性に遭遇した。

「はーい」

オレンジ色の髪の毛との旅館の浴衣をだらしなく着崩した格好をしている。

「君たちこんなところで何してるの?」

フランクな口調。

しかし、瞳には暗い影が宿っている、その不協和音がこの場にい

る者の心を、

グラグラと不安定にする。

「誰だ？見ず知らずの人間に話しかけてそんな態度では何がしたいのか、わからないな」

「そうね、あなた礼儀つてものを知つてゐるのかしら？」

「……残念ながらあなたたちには、用はないの」

視線だけがこちらに向けられる。

「そつちのお嬢ちゃん達のほうな」

「……なのは達に何の用なのよ？」

「そんなにカツカしなくても、手を出すようなまねはしないわよ」

なのは達をかばうように美由紀が前に出た。

「これからは……」

獲物を舐めまわす様な、視線と、

「オイタは控えるように……」

仄暗い音声。

じゃあね～、それだけ言つて満足したのだろうか、その人物は廊下をアーリン達とは反対に歩いていった。

「全く、おかしなやつはどこにでもいるものだな」

「そうね。せつかくの温泉氣分が台無しになっちゃたわ」

「でもさあ……、みんなを助けた時の恭ちゃんはかっこよかつたね、忍さん？」

「美由紀！？お前、いきなり何を言つて……」

「そうね。本当にカツ「よかつたわよ、恭也クン？」

「なつ！？」

一気に顔が真っ赤になる。「ムフフ、よかつたじゃない？」

「そ、そんなこと言つてると置いて行くぞ！」

恭也は赤い顔を忍から隠すように一人歩いて行ってしまった。

「もう、照れなくてもいいのに～」

美由紀が追いかける。

「あのね、アーリン君」

忍がアーリンを呼ぶと、

「さつきは、何とかなつたけど万が一の場合はね、」

友達と同じ匂いがして、

「妹たちのことを守つてあげてね？」

子守唄と似ていて、優しくて、しつとつとした声で、

「もちろん……です」

「うん。じゃあ、まかせたわ、お義弟くん？」

夕方になつても平穩な時間が流れた。

いきものがゆつぐつと、時間がゆつたりとしだし、また違うモノたちが起きてくる……

光から闇、白から黒、お天道様からお地獄さま。

幾何学的に対照的な、それでいて決して会つことのない背中合わせな関係が怪訝する……

深夜。大人組みのドンチャン騒ぎをやり過ごしてさつきと眠りに着いたアーリン達。酔っ払った大人の男性、三人の父親が「娘自慢大会」をおっぱじめ、なぜかしら、アーリンに審査員のお鉢が回りさらに、恭也からは無言の殺氣を放たれアーリンの疲労は最高に達していた。

布団を見つけるなりバタンキュー。おやすみなさい……

「こいつ寝るの早いわね、もう寝息立つてるし」

「いつもこんな感じだけど? アー君、起きるのも早いし、バツて寝て、バツて起きる感じかな?」

「そりなんだ。でもさつきのお父さん達のアレ、わたしたちが恥ず

かしかつたよね？」

「あそこまで露骨に言われるのはきっと誰でも恥ずかしいわよ『私の天使』なんて言つた時はあきれちゃつたわ」

「まあまあ、愛されている証拠つてことでアリサちゃん許してあげてよ」

「あんに、人前で、恥ずかしい」と言つてなんにも感じないのかしら？せめて、わたしたちのいなことこりでやつてほしかつたわ……ママ達がいなかつたら、もつとひどいことになつてたわよ」

「どうやら人前で自慢されたのが自信家のアリサでも相当恥ずかしかつたようだ。自分で言つたか他人が言つたかで違いがあるらしい。」

「さつきから何してたかと思つたら、すずかちゃん何してたの？」

「あ、アーリン君の寝顔、思つたよりもかわいいなつて……」

「そういえば、男の部屋は衛生環境がよろしくないからつて一緒に部屋になつちゃつたのよね……私にも観せなさいよ？」

アリサが寝ているアーリンに近づいた。

「ぐつすり寝ちやつて、寝顔はほとんど女の子だね。起きてればかっこいいところもあるのに」

「本当。ほらみてよ、ほつペがふにふに……」

「あ、アリサちゃんずるい。私も触りたい」

アリサとすずかが寝ているアーリンの頬を指で突いたり、つまんだりしていると、

「だめだよ2人とも。アーリン君が起きちゃつよ」

なのはが咎める。

「大丈夫。あれだけパパ達の騒ぎに巻き込まれたんだからよつぽどのところがなきや起きないわ。さつきのあの質問にも答えてないし、その罰よ」

「私も気になつてるんだよね、結局誰が一番かわいいのか。顔が真つ赤になつておろおろしちやつて答えられずにそのまんま寝ちゃうし、なのはちやんもそう思つてしまふ？」

「ふえ？！なんで私？」

「それくらいわかるわよ。ずっとアーリンのこと見てたじゃない」

「なのはの顔が赤に染まつた。

「そんなに照れなくても、血が繋がってるわけじゃないんだから気にしなくてもいいんじゃない？」

「だつてアーリン君は家族だし、血のつながりの前にそんな気持ち自体が……」

「そんなんも気にしなくていいんじゃない？本人が満足なら、それが一番いいことなの。少なくとも私は自分が好きでもない男と結婚なんて絶対イヤよ」

「アリサちゃんらしい意見だね。私も結婚相手ぐらいは自分で決めたいな、お姉ちゃんみたいのは憧れちゃうな」

しばらく3人で結婚について話したが夜も遅かったので誰からともなく眠りに就いた。

ただの闇が広がっている。

ただ独り、月がぽつんと夜空に穴をあけるだけで……

「（あれ、夢かな？）」

今まで幾度となく経験した不思議な感覚。現実感のない世界がアーリンの体を包んでいた。

「（まあ、いつもならすぐに目覚めるだらうけど）」

大概こんな感じの夢は『あの声』がして終つてしまつ。会話ではなくただ声が聞こえるだけなのだ。

叫びのようだ。

歓喜のようだ。

悲鳴のようだ。

でもどれかはわからない、すぐに忘れてしまつから。

「（誰なんだろうか？）」

こまさうな質問だ。

しかし、答えを聞くこともなく、そもそも質問 자체を忘れてしまつて行く……

もつじょ渺から覺めそつだ。

『……スター、マスター！』

「う……」

『起きてください！』

「う……ん。なんだ、どうかしたのか？……アルバス

『のんきにしている場合ではありません。先ほど、ジュエルシードの反応が出たのでなのはさんが先行しているのですがどうやらあの襲撃者と交戦状態になつたようです』

「なんだって！ 本當か！」

『お静かに。真偽のほどが確かではありますのでマスターに直接確認していただきないと』

「ああ、解つたよ。クソッ！」

アーリンはそのまま飛び出した。

辺りは暗く途中にある街灯が、ぽつんぽつんと光っているだけでそれがなければ自分がどこにいるのか迷いそうになつてしまつ。

「なのはの反応は……あつちか！」

すぐ近くには結界が張られている。やはり戦闘状態になつているようだ。

「間に合つてくれよ！」

結界に飛び込んだ。

そこでは、今様になのはがあの少女に刃を向けられていた。

「……どうやら援軍が来たみたいだね。でも、勝負は私の勝ち

間違いなくあの時の少女だった。

深紅の瞳と、金糸の髪。

レイジングハートからこの間収集されたジュエルシードのうちの一つが少女の黒い窓に納められた。

「もう、わたしたちの前の現れないで。この次は止められるかどうかわからないから……」

そう言つて背を向けようとするが、

「待つて！あなたの名前を教えて！私は高町なのはつていうの！あなたは？！」

「私はテスタロッサ。フエイト・テスタロッサ……」

もう来ないでと言い残して彼女はそのまま去つてしまつた。

「なのは！無事か？！」

緊張の糸が切れたのだろう。そのまま体を支え切れずに空中から落ちてしまつ。

地面と激突する直前にアーリングがキャッチする。

「アーリング？」

見たところ外見に大きな出血はなかつた。B-1も多少は焦げているがそれでも無傷に近いのは奇跡的だろう。

「ごめん……負けちやつた」

「気にしなくともいい。強いやつに負けるのは当然なんだし」

まずは傷の手当てだ、といつことじつものあいつを探すが……

「ひつちだよ、僕は」

物陰に隠れていたユーノが顔を出した。

じゃあ頼むわとなのはへ治療魔法をかけてもらひ。

「良かつた重傷じやないみたいで。相手も非殺傷設定だったみたいだね」

「あの子はこちらを殺すつもりはないみたい。でもどうじこんな危険なものを、わざわざ戦つてまで……」

「うへん。どうしてかはわからないけど、僕が見た感じ何かに焦つているようだつたよ」

「焦る？」

「何に焦るかまではさすがに分らなかつたけどね」

しばらくすると治療魔法も終了した。

いつの間にか、なのはは小さく寝息を立てて居る。よほど切迫した戦いだつたらしく、無理もないとは思うが……

「ひつなるのは予想できただけどね」

寝ているなのはをアーリンが背負つて運ぶことになつた。

「今回戦闘はできないし、僕は運べないし」

『遅刻してしまつた分のペナルティーだと思つてください』
わかつたよ、と言つてなのはを背負つて旅館に戻つた。

まだ、当分夜明けを迎えるにはない。辺りは吸い込まれそうな闇に包まれていた

とあるマンションの一角で。

「今日ははつまくいったね、フェイド」

「うん、このまま一気に集められちゃ えばいいけど」

今回は一度あの子たちについて行って『警告』をするつもりだつた。もうこれ以上わたしの作業をやまされないために。

あの子たちのためにも。
お母さんのためにも。

「あいつら、また来ると思うかい？」

「どうだろう？ できれば来てほしくないかな。せっかく警告もした
し」

あの……なのはつて子の方は魔力値が高いだけで、戦いに関しては素人だった。

問題はもう一人の蒼い子の方。

「出来れば、もう面倒なことは増やしたくない。お母さんとの約束が近い」

残された時間はあと少しだけ。

もしも、私が約束を守れなかつたら……、どうなるの？

簡単なことだ、考えなくともわかる。

残された時間とお母さんの優しい笑顔が、記憶が掌からこぼれていつてしまつ。水と同じように一度と元に戻らないとしたら？

「そんなこと絶対いやだもんね」

じゃあ、もう寝るよ。

ああ、おやすみなさい、フエイト。

そうだ、私にはアルフも付いているんだ。

だから、絶対に大丈夫だよ。

だから、あの頃の優しいお母さんに戻つてくれるよね？

フエイトの頬に一滴だけ、涙が流れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7304m/>

魔法使いの少年

2011年2月6日02時55分発行